

著名人が語り尽くす

# はだしのゲン

原爆をテーマにしたマンガ「はだしのゲン」がなければ、被爆の悲惨な実態がここまで伝わってこなかったのではなからうか。連載が週刊少年ジャンプで始まって今年で40年。作者の中沢啓治さんが昨年12月に亡くなってから、初めての夏となる。6人の著名人たちに、「ゲン」への思いを語ってもらった。

人は大きな力に引きずられる  
戦争の恐ろしさはそこにある

## 野口 健さん

外交官だった父の仕事の関係でエジプトに住んでいたとき、10歳ぐらいで初めて「はだしのゲン」を読みました。たまたま家にあっただけですが、日本のマンガが簡単には手に入らなかったため、何度も繰り返し読んでいたことを覚えています。



のぐち・けん 1973年生まれ。アルピニスト。富士山の清掃登山、遺骨収集活動などにも精力的に取り組む。

なくなり、親から大目玉をくらいました。(笑い)

ゲンに負けないぐらい悪ガキだった僕は、ゲンが米兵のジープに角砂糖を入れて故障させるエピソードに「本当に砂糖で車は故障するのかなあ？」と興味津々。近所にあった廃車寸前の車のガソリンタンクに砂糖を入れちゃった。見事に動か

原爆投下後のシーンは本当に生々しく、「うわー」と目をふせてしまうほどでした。ただ、ちょうど「ゲン」を読んでいた小学生のころ、祖父から戦争の話をよく聞かされていました。祖父は東南アジアの前線で

戦った軍人で、仲間や部下が苦しみながら死んでいった姿を目の当たりにしていた。「生きていてもウジがわき、その数日後には死んでしまう」。祖父の話と「ゲン」の生々しいシーンがリンクして、子どもながらに戦争や死の恐ろしさをリアルに感じたことを覚えています。2008年から国内外の戦没者の遺骨収集の活動に取り組んでいます。ところが、小学校や中学校から講演を頼まれたとき、その話題は学校からも保護者からも嫌がられることが多い。「死」や「戦争の生々しさ」を子どもが目や耳に触れさせたくない、というのが理由のようです。

どの時代でもヒーローものが人気のように、子ども



## 追悼

# 中沢啓治さん



2013.8.9

# 原発事故後の福島を見ても この国は今も変わっていません

## 神田香織さん

講演「はだしのゲン」を  
27年前から語っています。  
前座修業が終わって二つ目  
になったとき、記念にサイ  
パン旅行に行つたんです。

案内された観光名所が戦跡  
でした。戦争中、追い詰め  
られた日本人が飛び降りた  
バンザイクリフに立ち、戦  
争を講演のテーマにしてみ  
ようと思いました。

もっと勉強しなくてはと  
広島平和記念資料館を訪ね、  
売店で見つけたのが「はだ



かんだ・かおり 1954年  
福島県生まれ。講師。代表  
作に「はだしのゲン」「チェル  
ノブイリの祈り」など。

しのゲン」です。重かつた  
けれど、全10巻を買って帰  
りました。読むとパワーが  
伝わってきました。次から  
次へ驚くことが起きますが、  
ゲンたちは歌を歌ったり、

子ども同士でつつきあ  
ったりして乗り越えて  
いく。その明るさ、た  
くましさ。そして中沢  
さんの燃えるような怒  
りが感じられました。

原爆の悲惨な状況を  
これだけ力強く伝える  
作品はないと思ひ、す  
ぐに中沢さんに会いに  
行きました。1986  
年8月8日に国立演芸



場で発表する準備を進めて  
いたら、同じ年の4月にチ  
エルノブイリ原発事故が起  
きて、核問題が世界中で取  
り上げられました。不評な  
ら一回でやめようと思っ  
ていましたが、みなさん喜ん  
でくださって、中沢さんも  
応援してくれたんです。

中沢さんはものすごく明  
るい方で、いつもニコニコ  
していました。「ゲン」はか  
なり実体験に基づいて描か  
れています。お父さんは戦  
争に反対して非国民と呼ば  
れ、一家も石を投げられま  
したが、家族の絆がしっか  
りしていて、愛情豊かに、  
感性豊かに育つた方だと思  
います。4歳の弟さんを助  
けられなくて、夜中にガバ  
ツと起きて悔しさがよみが  
えると話していました。「自  
分たちの不幸を踏み台にし  
て幸せになってほしい」と  
いう言葉には感激しました。  
上京した中沢さんが広島  
出身と明かしたとき、まわ  
りの空気が変わったそう  
です。この国は大変な目に遭  
つた人をいじめるんですよ。

原発事故後の福島を見ても  
わかるように、それは今も  
変わっていません。

だから「ゲン」はちっと  
も古くならないんです。不  
滅ですね。3・11後はさら  
に真剣に聴いてくれるよう  
になりました。講演は、被  
爆したら人間はどうなるの  
か、悲惨な場面を10分か  
けて語り、妹の友子が生ま  
れる場面が第一部が終わりま  
す。音楽と照明を使った立  
体講演で命の尊さを表現す  
るので、みなさんワーツと

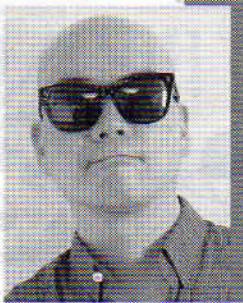
## 「ゲン」で原爆を知っている ぼくらの大きな財産です

### 宇多丸さん

ぼくらは子どものころに  
「はだしのゲン」を読んで  
いるから、原爆が使われた  
らどんな惨状になるのかを  
体感的に知っています。も  
ちろん、原爆を投下された  
唯一の国だからということ  
もあるけど、「ゲン」がある  
かないかの違いは大きい。  
ハリウッド映画に核爆弾  
が出てくるたびに、世界の

泣いて、元気になって帰っ  
ていただいています。

ゲンには元気のゲン、私の  
原点のゲンです。ゲンを語  
ってきたから私には思想が  
できました。庶民は等しく  
幸せになる権利があると、  
ゲンから教わったんです。  
60歳になったら徐々にフェ  
ードアウトしようと考えて  
いましたが、3・11で、そ  
うはいかなくなりまして。  
体が許す限り、ライフワー  
クとして語り続けたいと思  
っています。



うたまる 1969年生まれ。  
ヒップホップグループ「ライ  
ムスター」のラッパー。映画  
ゲームなどにも造詣が深い。

人はなぜこの程度の認識し  
かないのかと思うんですよ。  
ちよつとでかい爆発ぐらい

広島に落とされた原子爆弾で被爆した少年、中岡元二が、「はだしのゲン」の主人公だ。広島に住むゲンの家族は父親が戦争に反対するため非国民と呼ばれ迫害されながら、力を合わせて生きている。昭和20年8月6日、広島に原爆が落ちる。ゲンは偶然助かったが、父と姉、弟を失う。何もかも破壊された地で、ゲンは家族や仲間と力を合わせ、貧困に耐え、被爆者差別や圧政と闘いながら明るく生きていく。

この漫画は、作者の中沢啓治さんの自伝的作品だ。中沢さんは実際に広島で被爆し、家族や家を失った。家族構成も被爆の状況も、ゲンは中沢さんを投影する。「はだしのゲン」には、皮膚がずり落ち、目玉や内臓が飛び出し、ウジがわくなど凄惨な被爆者の描写があるが、中沢さんは実体験から、かなり表現をゆるめ、極力残酷さを薄めるようにしてか

### 「ゲン」は中沢さんの遺書



きました」という。(引用は中沢さんの自伝『はだしのゲン わたしの遺書』朝日学生新聞社から)

漫画家になった当初は原爆を題材にしなかった。(漫画というものは楽しいもの)という考えからだった。だが、被爆から21年後に母親が亡くなり、火葬の際に遺骨がなかったため、(原爆

開が報じたこともあって生き返る。75年に「市民」誌で連載が再開し、その後、「文化評論」「教育評論」と漫画誌ではない媒体で連載が続いた。85年にゲンが画家を志し、東京に向かうところで連載は終わっている。単行本はベストセラーとなり、アニメ化、映画化され、約20カ国語に翻訳もされた。平和教育の副読本などにも使われている。

中沢さんは、続編を考えていた。ゲンは東京で東京大空襲の孤児たちと仲間になり、絵画修業で訪れたフランスで原発問題に取り組むという構想だったが、中沢さんの目が白内障でよく見えなくなり、(執筆を断念せざるをえませんでした)。

というやつは、大事な大事なおふくろの骨の髄まで奪っていきやがるのか」と怒り、原爆を描き始めた。

週刊少年ジャンプで「はだしのゲン」の連載が始まったのは、1973年。翌年連載は中断し、石油危機の影響や出版社の意向でそのまま終了しかけたが、汐文社で単行本化し、朝日新

その後、中沢さんは肺がんに侵され、昨年12月、73歳で亡くなった。自伝には、「はだしのゲン」は、わたしの遺書です。わたしが伝えたいことは、すべてあの中にこめました」とある。

は基本的に戦うことが好きです。学校では「戦争はよくない」と教えていますが、「なぜいけないのか」をしっかりと理解するためには、悲惨なことも含め「知る」ことが大事だと思うんです。残酷な描写が多いから子どもに「ゲン」を読ませたくないという人もいますが、私は子どもにもこそ読んでほしい。遺骨収集の映像を流すと、エベレストや富士山清掃といった活動の映像よりも、むしろ子どもたちは真剣に見入っています。僕ら大人が考えるよりも、子どもはきちんと受け止め、考えたり判断したりできると思っています。

原爆の場面以外にも、ゲンの父親が戦争反対の態度を取ることで、一家が非国民として町や学校でひどいいじめを受けるくだりが印象に残っています。たとえば正しいことを言っている、戦争という異常な状況下では、人は大きな力に引きずられ、巻き込まれてしまう。もしかしたら、本当の戦争

の恐ろしさはそこにあるのかもしれない。今、改めてページをめくると、「はだしのゲン」は、日本人が戦後をたくましく生き抜いた「人間ドラマ」だと気づかされます。単なる反戦マンガではないストーリーや登場人物の魅力が、40年たっても愛され続けている理由でしょう。

